

冷泉
為村卿東行之和歌

皇國大
W
911.158
Re

60695

911.158
Re

為村卿東行之和歌

帝室圖書藏



と有り茶津の里に詠物詠ひし別ぬや詠りしを記

茶津

梅本里

梅本里

梅本里

梅本里

梅本里

素名

日暮り日た海を望みてと船ゆくハ波つらあるさやれ川



あ倍川水塔れ、鞠子乃張くとありあ晴るこ
まりねきに出入りすく富士城よりくくふ見
ねはといつことアかおろき浅きひき

晴^る日^のいこくと又と時あね雪にふきてア不二此祥
見初くと又しとあて言記名の空とあうりおれ不二の子

富士堂院の御

名と言記山に富士此根々ねの上の雪もあせりゆりそねん
友けと降りゆりゆあね雪とて根乃不二の芝山
あ都川の辺先立人の後りまつり此まひ海と
薬ととと此法世にゆくるりも移をともあ
後り此のくの河系此体くひくかともくア不二の祿

くくといさく江鹿の張くつく人のあまひさす
せく近き流きくお言流えくゆのらりやハ
又あらし流のそあこの三穂の春系
え後正と此形白く

富士とんと塔の流くあふ宿立出く松つけとり
流えくくを台流の汀よりあふふんして言記所の子
岩城山をくくこにきてえれやほとまき海子と事
三穂と流くのらあを系臨きつとさあうり末に流る松系

田子浦

田子の海士れ以汲あゆむるけりや中く袖の晴るるるえ
かゝ^し_し^し_し^し_し^し_し^し_し^し_し^し_し^し_し^し_し^し_し^し_し 終典は物語りのうら^ら 終河流はうき旅衣

ねまをともたされん袖のぬいとも
江之尻の弱くて建典紅のを引一本より上三本も
直糸の飾りに寄るあの日も未摘花の紅くは
より紅くとも一ひのくけ
夜明くし星を出立ぬ川を流されに今日も南
あまきと人くいひささく眺むやうく阿久
川を流りてちち又川あのみをささるる
うれぬるもいとちち一されと奇 富士のまき
眺む眺むらふん物といと節立居のぬやうくん
てくく日影をききぬち漕出く眺む言福を
いつくさん流りまらむむぬくの川を

ナツやうくぬの流るう一きせあれ
出立又海流ぬれ

富士川乃流り待たて出つ途と眺む言福を言ふ理あり
今日原より一系のあさり 富士流るうら
と人のいふされぬぬを立寄りてくけ
今うかのいよらんといふよ一ぬののうら
ぬの八重雲流の居すううちち山くま
さめゆけと^{七文}流るや一及そとくハ流衣袖
の家けさち当るひぬ中も一袖る言の
あり一 社富士の名おとてやありやわ
ら葉に流る富士は一年もとてや舞らる言れあり流りぬ

七文ハ流
流るうら
言の言
の言

歌根

松下りる後出てさこ山立の海ふをそれ奥をさるす
成迄石菰をさくは野局の折指上ら
近息 和歌の浦や
いら波のころと成くも海士衣言のいそれ意とそ志る
古き

こころけしてらち成くもさるすれ登りてそ名ふ志の浦へ
詠江府卯月十九

詠寄名所述懐和歌

右馬の結有久

まうけあひた成くもさるすれ山
みよのころと成くも乃松れ成たふこ



古く懐後とさるすれ夢をさ成く
うれあひ成り当座

卯月郭云

為村

東海の山時多都と成り人殺と教めさるきく

古く外成つ人初奇ふ記え

古く堀田正宗系典所結し本と事字

あまき内

延享三年夏六月下旬連水先生以本
寫之

後孫親出

たう子の雪おほくのこと
ありーをよひ出て

重復

清見眺望

清見つこやをこらや又たふひ浪のそけくれみほ乃和系
為水の移をけはけけのなをこへはらう
とつか橋はた水くあう次ふふんとあ人人のい
ぬくいーくはあうぬ

いほうりつ名のこあうきー珠のわにたけすもふふんの移

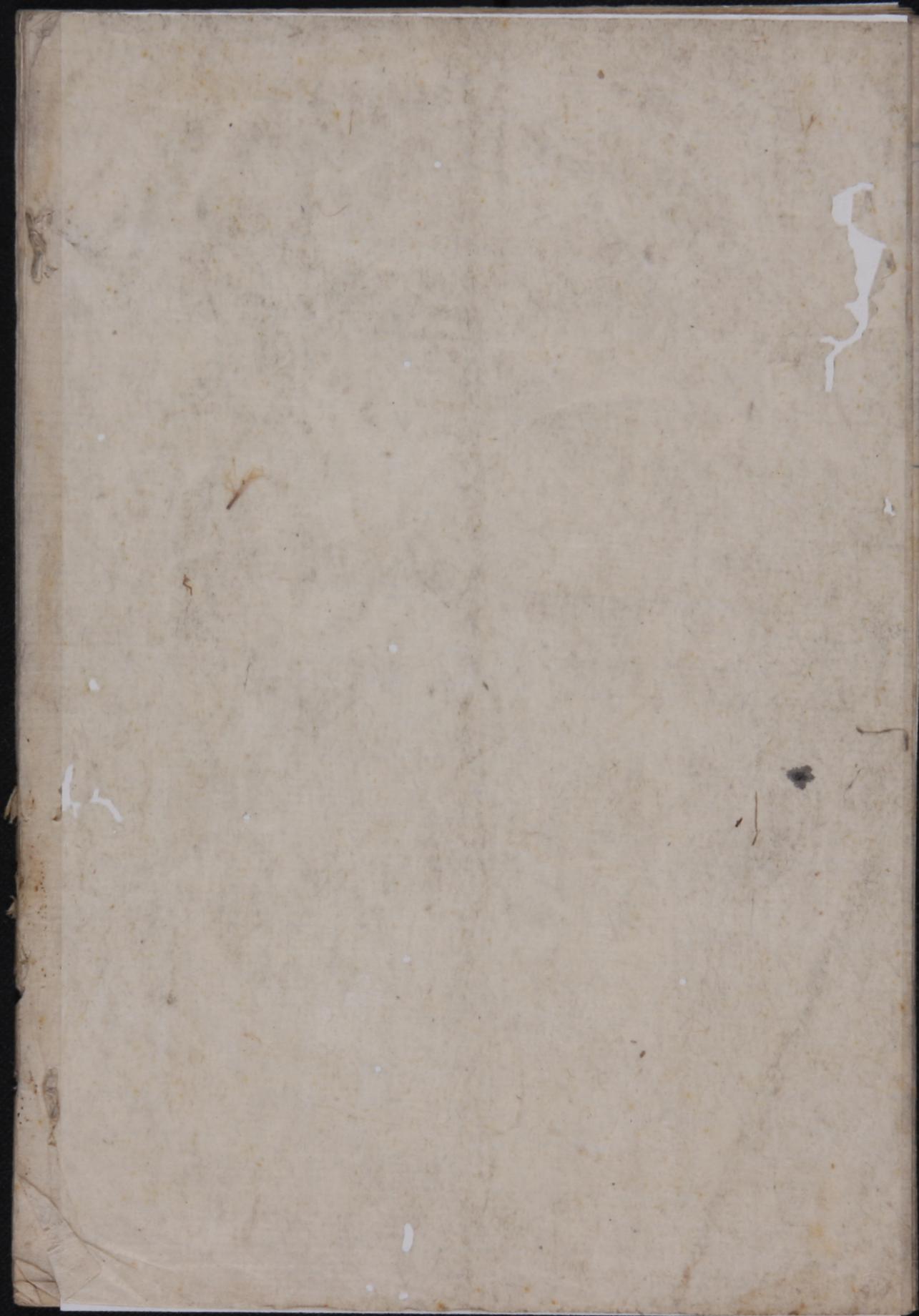
大磯

和歌
石田の
けり
又り
茶

右廣文子尋家藏以本書寫之
延亨三丙寅年七月上旬

右原親岑取藏





10060695

911.158-Re

冷泉為村卿東行之和歌

